

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成22年 2月24日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職名・学年 一貫制博士課程・5年

氏名 木下 彰子

事業区分	平成20年度・長期派遣助成		
研究課題名	現代インドにおける家庭内儀礼の変容 宗教的事物の商品化とその変容 (英文) Transformation of Domestic Rituals in Contemporary India: Commodified Religious Goods and the Worship to Them		
受入機関	デリー大学 (インド)		
渡航期間	平成20年9月25日 ~ 平成22年2月3日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	2550,000 円	
	使用した助成金額	2550,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	渡航費	150,000 円
		現地交通費	200,000 円
		現地滞在費	2200,000 円

成 果 の 概 要

本調査は2009年9月25日から2010年2月3日まで、インド・デリーにおいて行われた。現地調査の主目的は、現代インドで広範に流通している印刷物宗教画などの大量生産物が、家庭内儀礼へどのような影響を与えたのかを明らかにすることであった。

現代インドでは、色彩豊かな印刷物宗教画が広汎に流通している。それらは家庭内の礼拝スペースに祀られている神像に留まらず、ポスターやカレンダー、ステッカー等様々な形態で生活世界に遍在し、人々から日常的にプージャー（礼拝供養）を受けている。大量複製され安価に流通する印刷物宗教画は、それまで社会のマクロ構造に深く根ざしていた信仰や実践を社会的に脱文脈化させると共に、寺院参拝ができなかったアウトカーストの人々にも家庭で神を祀ることを可能にしたことなどが指摘されてきた。このように印刷物宗教画は民衆レベルの宗教実践を形成するモノとして宗教文化に多大な影響を与えていると論じられながら、それによって宗教実践が実際いかに変容したのかについてはこれまで十分に明らかにされてこなかった。ヒンドゥー教において信仰とは、具体的なモノとの関係のなかで育まれる実践であり、印刷物宗教画も単なる記号として消費されているのではない。調査者は家庭内における礼拝実践を通して、印刷物宗教画と信仰者との相方向的な関係性の構築を個別具体的な事例を通して明らかにすることに努めた。

具体的な調査内容として調査者は、デリー南部を中心に中間層のヒンドゥー教徒の家庭57世帯において礼拝実践をめぐる聞き取りと参与観察を行った。家庭内での礼拝の中心となるのは「マンディール（寺）」と呼ばれる礼拝スペースである。それらは寝室や居間の一角に設けられた小さな神棚であったり、プージャー専用の一室をあてた豪華なものであったりする。調査では、まず各家庭におけるマンディールの位置・方角や、プラティシュター等の神像に対する設置・灌頂儀礼の有無について統計をとると共に、祀られている全ての礼拝対象物の購入時期やその経緯（贈与の場合もある）について聞き取りを行った。神像の神聖化の重要な過程として、公的なヒンドゥー寺院では神像に対して厳密な灌頂儀礼が行われるが、調査中7割強の世帯でバラモンを介したそれらの儀礼は行われていない。本調査では、特に灌頂儀礼の有無に着目し、それぞれの場合における日々のプージャーを中心とした実践の相違を検証した。

また本調査では、信仰者と礼拝対象物との関係構築だけでなく、それらの関係性がどのよ

うに終了されるのかについても注目した。家庭内で祀られている神像は、破損した場合などにマンディールから取り出され、ガンガーやヤムナーなど神聖視される河川に流される。また、ドゥルガー・プージャーやガネーシュ・チャトゥルティー等の特定の祭礼期間に祀られる神像も、祭礼後に大量に河川に流される。しかしデリーでは近年、人口の急激な増加や下水処理の不整備などによる河川の水質悪化が深刻な問題となっており、神像などの宗教的事物の破棄も、河川汚染の要因として挙げられるようになってきている。2005年には The Delhi Plastic Bag (manufacture, sale and usage) and Non-Biodegradable Garbage Act が改正され、まずはサーマグリーと総称されるプージャーで使用されたモノ（花や果物、線香等）の破棄が法で禁止された。現在では多くの NGO がヤムナーの浄化運動に取り組んでおり、その中にはサーマグリーの再利用を目指し、花などの供物を収集して肥料にしたり、祭礼で使用する色粉にするなどして販売する団体も現れている。そして、このように環境問題への社会的関心が高まるなか、神像の処理をめぐる諸個人の実践にも変化がみられるようになってきた。インフォーマントのなかには、河川へ神像を流すことをやめ、より環境にやさしい方法として、庭に埋めたり、祭礼毎に新たに大きな神像を祀ること自体を止める人々がでてきている。神像の処理をめぐる人々の語りから、このような実践の変容には、信仰対象である神聖なるヤムナーと、水資源として保護されるべきヤムナー、という価値の拮抗がみられ、それは信仰者と「自然（神）」との関わり方の変容としても捉えられる。今後以上のような調査内容を精査し、宗教的事物の商品化の影響だけでなく、都市化や住環境の変化、環境悪化などの社会変容との関わりも考察しながら、印刷物宗教画をめぐる家庭内実践の変容を総体的に検証したい。

本調査は家庭内実践の調査において、予定よりも多くの家庭で調査を行ったこと、そして、家庭内儀礼との相違を考察するために、寺院での調査や幾つかの祭礼への参与観察を追加したことにより当初の調査期間よりも長期に渡っている。このような現地調査期間の延期を認めて頂いた京都大学教育研究振興財団の御理解と御援助に心より感謝申し上げます。